版本挿絵を用いた古典授業の構想：『徒然草』挿絵を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池上, 保之 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4916

版本挿絵を用いた古典授業の構想
―『徒然草』挿絵を中心に―

大阪樟蔭女子大学非常勤講師　池上　保之

要旨：本稿では、高校古典の授業（言語文化、古典探究）において、近世の版本挿絵を利用する方法を検討する。近時、学習指導要領が改訂され、新しい学習課程が始まり、様々な新しい取り組みが行われている。古典では本文テキストを精読することはもちろん重要だが、それでけでなく、関連する資料を用いて多角的・多面的な学習が求められている。その一環として、版本挿絵の利用は古典教育に資するものがあると考える。昨今、ウェブ上での資料公開が進み、また、教育現場における ICT も拡充している。そこで、デジタル資料として絵画資料、特に版本挿絵は簡便に利用できる。それらを用いることで、生徒の読解を助け、また古典に対する興味関心を引き出すこともできると考える。具体的には『徒然草』のいくつかの挿絵を取り上げ、授業での利用法を検討する。併せて、近世以来の注釈書や英語訳などの資料にも視野を広げることで、多面的・多角的な学習を実施し、豊かな古典学習をめざす。

キーワード：学校教育、言語文化、古典探究、版本挿絵、徒然草

はじめに

昨今、学習指導要領が改訂され、新課程での授業が始まっている。また、センター試験から大学入学共通テスト（以下、共通テスト）に代わり、新傾向の問題が出題されている。それに伴い、様々な面でこれまでとは違った学習が行われようとしている。

古典分野の学習は、これまでの国語総合、古典 A、古典 B から代わって、新課程では言語文化、古典探究で主に扱われる。言語文化は近代以降の小説と古典で構成される。新課程、共通テストの変化も相まって、古典の授業においても、これまでのテキスト中心の学習はもちろんだが、それに加え新たな学習の動きが起こっている。

そのような状況を鑑み、本稿では、古典の授業において江戸時代の版本挿絵の利用について検討する。現在、資料のウェブ上での公開や、学校現場での ICT の導入なども進みつつあり、その利用は格段に容易となっている。それらの利用方法を確認し、授業での課題設定について考察する。

1　挿絵利用の位置付けと効用

古典の授業においては、辞書や文法書を用いて、テキストを現代語訳し、内容を理解するという学習がメインであったと思われる。そのためか、生徒の古典に対する興味関心は低いものとなっており[(1)]、その点の抜本的な改革はまだ進んでいないように思われる。また共通テストにおいても、これまで同様に時間内にテキストを読解し設問に答えるものとなっており、文法に関わる問題も出題されている。文法学習は現段階では変わることなく、中心的な課題であるだろう。

一方で新しい活動も求められている。新学習指導要領では次のような項目が注目される。

・言語文化
3 内容の取扱い（4）
ア　内容の〔思考力，判断力，表現力等〕の「B 読むこと」の教材は，古典及び近代以降の文章とし，日本漢文，近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに，我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう，我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げること。また，必要に応じて，伝承や伝統芸能などに関する音声や<u>画像の資料</u>を用いることができること。（傍線筆者、以下同じ）

・古典探究
2 内容〔思考力、判断力、表現力等〕A 読むこと（1）
ク　古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について

自分の考えを広げたり深めたりすること。

同項目（2）

ォ　古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。

すなわち、古典作品の文章から、関連ある資料を通して多面的・多角的に検討し、それらを発表などでアウトプットする、といった学習が求められているのである。作品を多角的に扱うための資料は様々に考えられる。教科書や便覧においても図像、朗読などの音声データが用意されている場合も少なくない。

ただ、やはり教科書などに収載されたものだけでは限界があるのではないか。教材に応じて、適宜教師が資料を得ることができれば、それらの問題を一部緩和することができるではないか。そこで提案したいのが、近世期の版本挿絵の利用である。絵画資料として作品を多面的に検討することができ、また、その取得も容易である。

そもそも古典作品の多くは絵画資料を伴う場合が少なくない。有名古典の絵巻物は多数存在する。これらはもちろん限られた階層でのみ享受されたものであるが、作品の享受はテキストだけによったものではなかった。近世には印刷技術が発展し、多くの挿絵入りの版本が生産された。古典作品にも挿絵が付され、より多くの層に享受されることとなった。文学作品の享受には絵画資料も重要な位置を占めていたのである。

しかし、これまで古典教育は様々な制約上の都合からもテキスト中心の学習になっていたのではないか。テキストの精読は最も重要な学習課題であるだろう。しかし、挿絵などの絵画資料を併せて読むことで、より豊かな広がりを持った古典学習が可能になるのではないかと考える。

昨今、多くの絵画資料はウェブ上での公開が進み、量・質共に充実している。版本挿絵の取得方法については、次節で確認するが、利用は非常に簡便になっている。また、学校における ICT の導入も拡充しつつあるのではないか。少なくとも、ウェブ上から画像を取得し、配付物を作成することは無理のない範囲で行なえるものと考える。

また生徒にとっては、テキストだけでは理解が難しいものに関して、読解・理解を助けるものとなるだろう。さらに、挿絵などを見ることで、過去の風俗などを視覚的に知ることができ、古典世界のイメージを広げることができる。そして、生徒の興味関心を引き出すことも期待できるのではないかと考える。

一方、絵画資料を読解するという学習課題も可能である。テキストと絵画を併せ、思考・判断力を問う課題の設定もできる。2020 年センター試験漢文において、内容に合致する絵を選ぶ問題が出題された。また、2021 年共通テスト漢文では、注に図像が含まれていた。それは、過去の図像ではなく、テスト問題のために作成されたものであったが、今後このような図像と併せた出題も考えられる。過去に作られた絵画資料を用いることが必ずしも重要ではないが、図像を伴う読解は求められており、版本挿絵はその学習のための一つのツールともなり得ると考える。

絵画資料の利用は版本挿絵に限るものではないが、様々な面で有利である。作品によっては絵巻など彩色肉筆の資料が存在するが、それらはウェブ上に公開されていない場合が多く、ライセンスの問題もある。その点、版本挿絵は今日ウェブ上に多数公開されている。さらに、説話集など個別話の絵巻などが存在しない作品についても挿絵を持った版本が存在する場合があり、学校教育で扱われる多くの作品に対応できるのである。

版本挿絵の利用は、生徒の興味関心を引き出し、古典理解を助け、また、新学習指導要領の要請に応えるものである。利用方法についても、昨今の資料公開や ICT 環境の充実もあり、簡便になっている。次節では、その利用方法を確認する。

2　版本挿絵の利用方法

昨今、ウェブ上での資料公開も充実しており、ネット環境さえあれば容易に閲覧できる。検索エンジンに作品名を入力するだけでも絵巻などの画像が閲覧できるだろう。そのような中で、古典籍、特に版本の画像データを多く公開しているのが次のサイトである。

- 国文学研究資料館　新日本古典籍総合データベース[(2)]
- 国立国会図書館デジタルライブラリー
- 早稲田大学　古典籍総合データベース

それぞれのサイト内の検索機能を用いて公開された画像を探すことができる。種類・件数の多さでは新日本古典籍総合データベースが優れている。国立国会図書館デジタルライブラリーは近代以降の資料の公開が主であるが、古典籍もある。早稲田大学が公開する古典籍総合データベースでも多くの古典籍が公開されており、閲覧が簡便である。

著作権・ライセンスに関しては、いずれのサイトでも、教育活動で用いる範囲であれば概ね問題なく利用

できる。新日本古典籍総合データベースについては所蔵の関係で一部規制がある場合もあるので、それぞれの資料のライセンス項目を確認する必要はある。

これらのサイトで古典作品の江戸期版本から挿絵を取得することができる。それらを配付物へ掲載することもできるし、ICT 環境があれば授業中に直接ディスプレイすることもできるだろう。

本稿では新日本古典籍総合データベースから資料を取得し利用した。次節から授業での具体的な利用について検討する。

3 『徒然草』第 68 段　挿絵を読む

『徒然草』は 14 世紀前期に兼好によって書かれたが、その後約 1 世紀ほどの享受は不明である。室町戦国期にかけて連歌師などの間で読まれていたようだが、その詳細な享受を窺がい知ることはできない。『徒然草』が注目されるようになるのは近世に入ってからである。折しも印刷技術の進展により『徒然草』は印刷本で出版され、広く読まれるようになった。その版本の中には挿絵を有するものも少なくない。近世期において『徒然草』は挿絵を伴って享受されていたのである。

版本挿絵に限らないが、『徒然草』絵画資料の研究も進んでおり、多くの成果が報告されている[(3)]。それらの成果に学びつつ、学校教育活動での『徒然草』挿絵の利用を検討したい。本稿では主に次の版本から挿絵を利用する。

・『なぐさみ草』慶安 5 年跋　松永貞徳

『徒然草』絵画化の最も早いものとされ、157 図に及ぶ挿絵を有する。以降の『徒然草』絵画に影響を与える。精緻な筆致で気品ある挿絵となっている。中には解釈の難しい挿絵も存在するが、概ね章段を適切に理解して描かれている。

・『首書つれつれ草』元禄 3 年刊　三木隠人[(4)]

『なぐさみ草』など先行の図像の影響を受けつつも、新しい図像も多い。（以下、元禄 3 年刊本と呼称する）

それでは、版本挿絵を通して内容の理解が深まるような例を検討する。それが『徒然草』第 68 段である。本文の読解の後、挿絵を確認することで、より深い内容理解が可能となる。第 68 段は次のようのな話である。

筑紫になにがしの押領使などいふやうなるもののありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。

ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来りて囲み攻めけるに、館の内に兵二人出で来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してげり。いと不思議に覚えて、「日ごろここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らにさぶらふ」と言ひて失せにけり。

深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

筑紫のある押領使（国司の命で地方を治める在地勢力の長）は大根を全てのことに効く薬と信じて朝ごとに 2 本ずつ食べていた。ある時、館の警備が手薄になっているところを、敵の軍勢に攻められ絶体絶命の危機に陥った。しかし、館の中から 2 人の侍が現われ敵を撃退してくれた。押領使は普段見ない者たちなので誰なのか尋ねると、2 人は「長年毎朝、召し上がっている大根です」と答えて去っていった。

本段は大根に助けられるという奇想天外なものであり、ユーモアな雰囲気の章段である。大根の侍が語った「朝な朝な召しつる」の「召す」は「召し上がる」の意だが、同時に「召し使う」の意味も含意されているだろう。また、押領使は大根を「よろづにいみじき薬」として食べていたが、それは「万病に効く」という意味と、「全てのことに効く」という含意もあり、その結果、絶体絶命のピンチにさえ効果があり助けられたと捉えることもできる。

このような言葉遊び的な要素も含み、また一種の報恩譚とも取れる話であるが、話の筋自体は一読すれば明快であるだろう。

さて、テキストを読解後、生徒に挿絵を提示し、どのような場面を描き、それぞれどの人物を描いているのか判別させる。（図 1）

左側に塀と門が見えるため押領使の館であると分かる。その前に 3 人の人物がおり、武器を振りかざしている。これが押領使と 2 人の大根武士である。そして、右側の 3 人は、甲冑を身に付けているが後ろを振り返り逃げている。これが押領使を襲おうとして撃退された敵たちである。

実際の襲撃がどのようなものであったか、『徒然草』の記述からでは詳しくは分からないが、『なぐさみ草』においては、敵は甲冑をまとい、武装して攻め込んでいる。対する押領使は突然襲撃を受けたため甲冑は装着せず、普段着のまま刀を取って応戦している点に注目したい。『なぐさみ草』の挿絵は、その場面の状況

図1 『なぐさみ草』第68段

図2

図3

を的確に捉え描いているのである。

また、左側の押領使と大根武士であるが、3人のうち、どれが押領使で大根武士たちなのか、見分けられるだろうか。ここにも挿絵の工夫が見られる。両サイドの人物の服装に着目したい。この2人の服の模様をよく見ると大根が描かれていることが分かる。(図2・3) よって、この両サイドの人物が助けに入った大根武士であり、真中の人物が押領使であることが分かるのである[5]。3人で力を合わせて賊を撃退しているのである。

以上のように、一枚の挿絵であるが、一段の状況を的確に捉え、また細やかな工夫を凝らし描かれていることが分かる。このような内容を、生徒と共に確認することで、一段の理解がより深まるものと考える。テキストを読むことでも話の筋は把握できるが、押領使の無防備であった状況など、挿絵を併せて見ることによって逸話のディティールが想像されるのである。挿絵を用いることによって、より深い理解を可能にするのである。

4 『徒然草』第32段「その人」の形象

次に一段の解釈が時代によって変遷する様子を、挿絵と注釈を見ながら確認できる『徒然草』第32段を検討する。第32段は次のような章段である[6]。

九月二十日のころ、ある人に誘はれたてまつりて、明くるまで月見歩くこと侍りしに、思し出づる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いとものあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほことざまの優に覚えて、物の隠れよりしばし見ゐたるに、妻戸をいま少し押しあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうのことは、ただ朝夕の心づかひによるべし。

その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。

長月二十日ごろ、兼好はある貴人に誘われて月を見ながら歩くことがあったが、その貴人は思い出したところがあり、案内の者を先に行かせて、ある屋敷にお入りになった。兼好は外で屋敷の様子を窺がっていたが、庭は荒れて露がたくさん置いているが、わざとらしくない薫物の匂もして、ひっそりと忍んでいる様子がたいへん情趣を感じさせるものだった。しばらくして貴人は屋敷から出てこられたが、兼好はなお有様が優美に思われたので、物陰から中を窺がっていると、宿の主は貴人を見送った後、妻戸を今しばらく開いたまま月を眺めているようだった。もしすぐに家の中へ入ってしまっていたら残念だっただろうが、そうではなかった。外から見られているとは、中の人は知るはずもない。このような心遣いは、ただ日頃の風流心によるものであるだろう。しかし、その人はほどなく亡くなってしまったということを、兼好は後日聞いたのだった。

教科書にもよく採用される有名な章段である。現在、諸注釈書やそれに応じた教科書において、この宿の人物、「その人」は女性であると考えられ、一段は逢瀬の場面であるとされている。それは男性の貴人が訪ねていくという状況や、一段に用いられる語句が『源氏

物語』『枕草子』などの王朝文学と通うことなどが主な根拠とされている。本段は王朝文学を彷彿とさせ、風流心をもった女性だったが、ほどなく亡くなってしまったことを兼好が悼み称揚して記した章段と解釈されている。

しかし、このような解釈は近世以来ずっとなされてきたわけではないのである。近世においては全く異なる解釈がされていた。ここで、図4・5を見てみたい。

図4『なぐさみ草』においては、供を連れた男性貴族が右へと進んでおり、屋敷から退出している場面だと考えられる。兼好らしき僧形の人物は小柴垣の外から中を窺がっている。そして、宿から月を眺める人物であるが、男性の貴族が描かれているのである。現在は女性と考えられている人物が、近世においては男性と捉えられていたのだろうか。なお、この挿絵で他に注意しておくべき点として、本文では「妻戸」となっているが、絵では「遣戸」になっていることや、時期が二十日とあるため満月ではなく、すこし欠けた月を描くべきである、といったことが挙げられる。必ずしも本文の内容を忠実に絵画化しているわけではない。

さて、一方で図5元禄3年刊本においてはどうだろうか。貴人の男性は屋敷の外におり、兼好らしき僧形の人物と共に外から中を窺がっている。そして、宿の人物は女性に描かれているのである。本文には「その人」としか書かれていないが、絵画化においては男性であるか、女性であるかは必ず描き分けなければならなかったのである。

今日では、宿の人物は女性であるとされる。そうすると、『なぐさみ草』の挿絵は解釈を間違ったのだろうか。しかし、実は近世においては宿の人物は男性であると考えられていたようなのである。そのことを確認するために以下いくつか近世の注釈書の見解を確認したい。これらの注釈書の見解も生徒に提示することで、近世期の解釈の一端を読み取り、また複数のテキストを併せて読むという間テキスト性を満たす課題設定ができる。

【資料1】松永貞徳『なぐさみ草』（慶安五年跋）大意

客の帰りたる跡に、はやく戸をたつることはせぬ事なりと礼記にも侍り。それは礼の法を教へたるのみなり。これは客への時宜にはあらず。主の底から月をもてあそぶ心あらはれてやさしき風情なり。月花も多くは名聞にこそ眺め候へ。かやうに真実にもてあそぶ人は、稀なる事に侍る。

【資料2】北村季吟『徒然草文段抄』（寛文七年刊）

跡まで見る人ありとはいかでか知らん　兼好かく

図4 『なぐさみ草』第32段

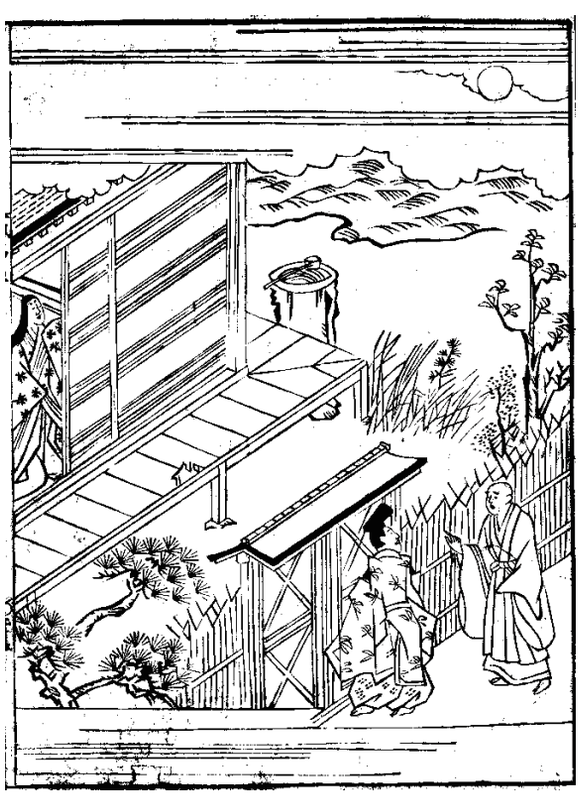


図5　元禄3年刊本　第32段

見ゐたるべしとは亭主いかでか知らんとなり。彼の人、平生の心遣ひやさしき故となり。

【資料 3】増穂残口『つれづれしののめ』（享保三年刊）

そのまま急ぎかけ入るなり。さすれば客に飽きたるなり。月を見て居るは客に残り多くて戸をさしかね、ついでながら立ちやすらふ、情深し。下ざまに客を送りて戸を荒くさしましてあくびなんどするは、沙汰の限りなり。友を愛するはこれぞ風雅の情なり。

近世期の注釈においては宿の人物について、殊更に性別を議論している様子はない。ただ貴人と宿の人物の関係は友人関係であるとされており、すると宿の人物は男性であると捉えられていると考えてよさそうである。よって『なぐさみ草』挿絵が男性に描いたことは、当時の解釈を自然に反映したものであったということもできるのである。

ただし、元禄 3 年刊本では女性が描かれたことから、近世においても宿の人物を女性と捉え、貴人の愛人と見る考え方もあったようである。注釈書においては、女性であるとする説はほぼなく、友人関係と捉える解釈が大勢を占めている(7)。

江戸時代が終わり、近代に入ってからはどうだろうか。明治の初めに出版された『徒然草』の注釈書においては、江戸時代の解釈を継承し、友人関係として捉えている。だが、明治も末になると、新しい解釈が起こってくる。以下、明治末から大正期の解釈を確認しよう。

【資料 4】井上頼文『徒然草講義』（明治二七年）

かの女のやさしく奥ゆかしく覚えたることは、人目の前ばかり、俄にしても出来ぬことにて只朝夕の心づかひによるとの意なり。

【資料 5】内海弘蔵『徒然草評釈』（明治四四年）

この家の主人は、勿論、女である。

兼好が、その貴人の、こゝに立ち寄られたのを、おもてに待ちうけてゐながら、そのゆかしい趣に感じゐるところは、また、さすがに、純客観に立ち得る、趣味の人であつたといふことがわかる。

【資料 6】沼波武夫（瓊音）『徒然草講話』（大正三年）

この「わざとならぬ」と云のが兼好の絶えず人に注文しつゝある所である。（中略）この「わざとならぬ」様を、兼好は嬉しく可懐しく思つて、同行者が出て来た後も見て居たのである。すると「妻戸を今少しおしあけて月見るけしきなり」だものだから、すッかり気に入つて了つたのだ。

「朝夕の心づかひ」と云のは日々の修養である。「優なる人」になるのが為の修養である。「其の人程無くうせにけり」と云所で、前々からの連想の途が見える。死人を説き、今は死んだ人の雪の返事を思ひ出し、又今は死んだ人の月下の優なる様を思ひ出したのである。さうして前段の返事の主の女であるらしいと云事が、この段の主人公が女であることの為に、なほ然うらしく思はれて来る。

井上頼文は宿の人物を女性であるとするが、特に詳しい説明はない。女性であることを詳細に述べるのは内海弘蔵や沼波瓊音からである。「その人」は貴人と恋愛関係にあった女性で、一段は逢瀬の場面を描いたものだというのである。

この解釈以降、女性説を採るものが激増し、今日でも通説となっている。しかし、近世においては逆に男性の友人として捉えられ絵画化もされてきたのである。本段は、時代と共に解釈が移り変わり、絵画資料などへも影響を与えるという享受史の一端を知ることのできる章段なのである。

さて、この章段は英訳ということに関しても興味深いものがある。以下、絵画資料とは直接関係はないが、その点について確認したい。学習指導要領においても外国語に訳すというような、他言語との関係を考える活動が推奨されている(8)。外国語と関わる学習活動として展開できるだろう。

【資料 7】G. B. Sansom “The Meditations of Recluse in the 14th Century”（明治 44 年）

（前略）Betimes my friend came out, but I, still feeling the strange beauty of the scene, stood for a while hidden in the shade, and so perceived his host, instead of forthwith hastening to retire, open the shutters a little wider, as if to gaze upon the moon; and, as he could not have known that he was being watched, it must have been because he was at all times fond of such things. I heard that he soon after passed away.

【資料 8】Donald Keene “Essays in Idleness”（昭和

42 年）

（前略）In due time, the gentleman emerged, but I was still under the spell of the place. As I gazed for a while at the scene from the shadows, someone pushed the double doors open a crack wider, evidently to look at the moon. It would have been most disappointing if she had bolted the doors as soon as he had gone! How was she to know that someone lingering behind would see her? Such a gesture could only have been the product of inborn sensitivity.

I heard that she died not long afterwards.

資料 7 はジョージ・サムソン（1883〜1965）による『徒然草』の最も早い英訳である。ここでは宿の人物は「he」で訳されており男性と捉えられている。この訳は明治 44 年（1911）に出版されている。この当時まで日本での解釈は、江戸期の解釈を踏襲して男性と捉えられており、その解釈を反映しているようである。明治の末頃から女性であるとする説が優勢となってくるが、その解釈はまだ影響していないようである。

一方、資料 8 はドナルド・キーン（1922〜2019）の英訳『Essays in Idleness』であるが、ここでは宿の人物は「she」で訳されている。これは現代の女性説を受けたものだと考えられる。このように英訳においても、日本での解釈状況が反映することは興味深い。

古文の英訳というのも様々な課題を設定でき、学習に資するものがあると思われるが、ここでは絵画資料と共通する特徴を考えてみたい。絵画資料においては、宿の人物を男性か女性かに描き分けなければならなかった。『徒然草』本文には「その人」と性別が明記されていないものをどちらかに判断して描き分けたのである。

英訳においても同様のことが起こっている。英訳の際にも、男性であるか女性であるかは書き分けなければ自然な文章にはならないのである。「the person」などと書くことも可能ではあるだろうが、やはり自然な文章とは言えないだろう。ここでも男性女性を判断して「he」か「she」で訳することになり、解釈が反映している。

このように、『徒然草』本文では「その人」として性別を明記せずに記すことができたものが、絵画化や英訳の際には判断を迫られることになったのである。そして、そこには当時の本文解釈が反映しているのである。

これらの注釈・絵画・英訳について、学習用のワークシートにまとめた。稿末に貼付したので、参照されたい。

5 『徒然草』第 89 段　挿絵を描く

最後に、一段の挿絵を生徒に作成させる課題を検討したい。挿絵を伴う課題を行った後であれば、生徒たちにも挿絵を描くイメージがしやすいと考えられる。任意の作品を読解後、一段の内容を踏まえた挿絵を生徒に描かせる。テキストの内容の把握はもちろん、ポイントとなる部分を的確に捉えて絵画化しなければならない。その際、絵の巧拙を問う必要はない。棒人間でも構わないだろう。ただ、テキスト内容の適切な理解を反映させられるかが評価の観点となる。

一例として、『徒然草』第 89 段で考えてみたい。猫またで有名な章段である。

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」と人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経あがりて、猫またになりて、人とることはあなるものを」と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺の辺にありけるが聞きて、ひとり歩かん身は心すべきことにこそと思ひけるころ、下なる所にて夜更くるまで連歌して、ただひとり帰りけるに、小川の端にて、音に聞きし猫また、あやまたず、足もとへふと寄り来て、やがてかきつくままに、頸のほどを食はんとす。肝心も失せて、防かんとするに力もなく足も立たず、小川へ転び入りて、「助けよや、猫またよや、猫またよや」と叫べば、家々より松どもともして走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。「こは如何に」とて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物取りて、扇・小箱など懐に持ちたりけるも、水に入りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふはふ家に入りにけり。

飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛び付きたりけるとぞ。

猫またという化け物が出ると聞いていた、ある法師は、連歌の会で夜遅くなり、一人で帰っていた。すると噂の猫またが現われ、自分の首に喰らいつこうとしたので、慌てふためき小川へ落ちて、大声で助けを呼んだ。そこで、周りの家の人達が灯を持って駆け付けた。見ると、隣家の法師で、「どうしたことだ」と川から助け起こしたのだった。連歌会の商品の扇や小箱

は水に濡れてしまったが、幸い命は助かったと、ほうほうの体で家に入ったのだった。はたして、猫まただと思ったものは、法師の飼犬で、暗闇でも主人が帰ってきたことに気付いて飛びついたのだった。

本話は、書き出しから猫またに襲われるところまでが一文で書かれ、非常にスピード感のある文章となっている。そして、危いところだったが、なんとか助かった旨を記し、その後、短文で話のオチが付されている。短い文章の中に、緊張とその緩和があり、近世以来人気の高い章段である。内容自体は難しいこともなく、読解は容易であると思われる。

学習課題としては、本文の読解の後、生徒にこの章段の挿絵を作成させるというものである。その際、ポイントとなるのがどの部分を絵画化するかということである。この章段では、やはり猫またの正体が飼犬であったという点が是非とも分かるように描きたい。適切な読解がなされていれば、その点を反映した絵画となるのではないか。図6・7は以前、実際に授業で同様の課題を行った際の生徒の提出物の一例である[9]。ここでは、猫またに怯える人（法師）と、その正体の飼い犬が描かれている。

また、課題の提出後、『なぐさみ草』など近世の挿絵を確認するのもよいだろう。自身の絵画化と比較検討できる。図8『なぐさみ草』では、法師が川へ転落する瞬間を描いている。駆け寄っているのは黒い犬である。また同時に、周りには騒ぎを聞き、手に灯を持って駆け付けた住民も描かれている。1コマの中に一段の要素が詰め込まれた形になっている。

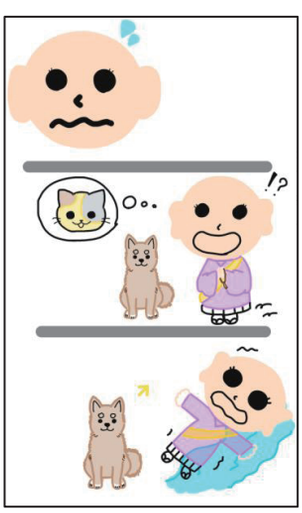


図6

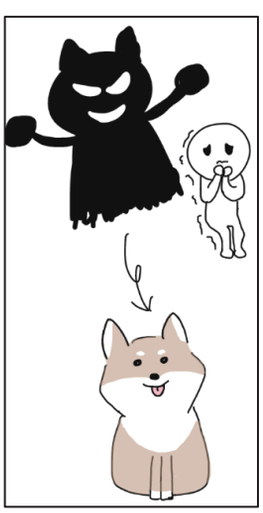


図7

このような絵画化するという課題はいずれのテキストにおいても実施することが可能であるだろう。適宜、授業進度などを鑑みて行うことができる。実施後、近

図8 『なぐさみ草』第89段

図9 『宇治拾遺物語』第173話「清滝川聖事」

世期の絵画資料などがあれば併せて確認することで、理解も深まるものと考える。その際、先述のデータベースが有効である。

今回は挿絵を描くという課題設定を検討したが、物語などの場合は1コマでまとめることが難しい場合もある。その際には4コマ漫画にまとめさせるというような活動も有効であるだろう。話の推移を適切に把握し、4場面に落とし込むという作業は、総合的な読解力を必要とする。一例として図9は『宇治拾遺物語』第173話「清滝川聖事」を題材として同様の課題を実施した際の提出物である(10)。

以上のような学習者に絵画化させるという課題においては、学習者の内容理解度を知ることもできる。テキストを適切に理解し、ポイントを押さえて描かれていれば、学習の達成度は高いものと評価できる。一方、絵画化という作業を通して生徒の誤解が可視化される場合もある。現代語訳だけでは気づくことができない部分について、絵画化という作業を通して、生徒の理解度を測ることも可能なのではないかと考える。

おわりに

如上、本稿では学校教育における古典の授業での版本挿絵の利用について検討した。学習指導要領の改訂により、新しい学習課程がスタートし、その中ではこれまでにはなかったような、多様で多角的な視野からの古典学習が求められている。その要件を満たすものとして、版本挿絵などの絵画資料の利用が有効である。昨今では、古典作品に関わる資料の公開も進んでおり、ウェブ上で画像の取得などが容易になっている。折しも、コロナ禍も関連して、教育現場でのICTの拡充も進んでおり、デジタルでの資料利用も可能になりつつあるのではないか。これらの状況を踏まえ、版本の挿絵を利用することは、古典学習において有効なツールとなり得る。そして、学習者の理解を助け、興味関心を引き出すことにも繋がっていくだろう。

今後は、新しい課題の構築や、その実践なども通して検討していきたい。

引用文献

『徒然草』本文の引用は、小川剛生校注『新版　徒然草　現代語訳付き』（KADOKAWA・2015年）により、適宜表記を改めた部分がある。

その他の引用本文は以下のものによった。一部表記等を改めた部分がある。

・井上頼文『徒然草講義』弘文館等・1894年
・内海弘蔵『徒然草評釈』明治書院・1911年
・沼波瓊音『徒然草講話』東亜堂・1914年
・久保田淳校注 新日本古典文学大系『徒然草』岩波書店・1989年
・G. B. Sansom “The Meditations of Recluse in the 14th Century” “Transactions of the Asiatic Society of Japan” 39巻所収 Asiatic Society of Japan・1911年
・Donald Keene “Essays in Idleness” Columbia University Press・1967年

徒然草の近世注釈書は国文学研究資料館蔵のものを翻字し、適宜表記を改め句読点を付した。

注

1、2005年、教育課程実施状況調査（平成17年度高等学校教育課程実施状況調査）によれば「生徒質問紙調査をみると、「古文は好きだ」、「漢文は好きだ」に「そう思わない」又は「どちらかといえばそう思わない」と否定的な回答をした生徒は依然として多い」と指摘されている。

2、「新日本古典籍総合データベース」は令和5年3月1日より「国書データベース」に移行し、「新日本古典籍総合データベース」自体の利用は令和5年2月28日までとなる。

3、齋藤彰「徒然草版本の挿絵史」（一）～（十三）（『学苑』2002年～2004年）、「徒然草の近世期刊本・注釈書目」（『徒然草の研究』風間書房・1998年）

島内裕子「徒然絵の諸相」（『徒然草文化圏の生成と展開』笠間書院・2009年）

島内裕子・上野友愛『絵巻で見る・読む徒然草』（朝日新聞出版・2016年）など。

4、挿絵は新日本古典籍総合データベースで以下の資料を用い、該当章段のページを利用した。

・『なぐさみ草』
国文学研究資料館 高乗勲文庫
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016213/viewer/1

・『首書つれつれ草』元禄3年刊本
大阪公立大学中百舌鳥図書館
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100134286/viewer/1

なお「画像ダウンロード」から高解像度のものを入手後、トリミングを行い、Word上で「図の書式設定」から「図の修正」「図の色」でコントラ

スト・色を調整している。概ね白黒75%、鮮やかさ400%で処理し、それぞれコントラストなど微調整した。

5、注3前掲齋藤彰「徒然草版本の挿絵史」(一)(『学苑』738・2002年)では、第68段挿絵について「筑紫の押領使何某の館を襲う敵(鎧姿の三人の武士)を防戦して、追い返した武士(土大根の絵柄を染めぬいた小袖を着用する三名。本文では二名)」と指摘されている。ただし、服に大根が描かれるのは両サイドの人物2名であり、中心の人物の服には大根は描かれていない。

6、第32段の解釈、挿絵の変遷については以前に検討したことがある。拙論「絵入本から振り返る『徒然草』」(絵入本ワークショップⅤ　2012年12月)、「『徒然草』第三二段考―「その人」の解釈をめぐって―」(博士論文『『徒然草』研究―文章形態分類と個別章段の再検討―』2020年3月所収)を参照されたい。

なお第32段の絵画化の違いを検討する課題は、東京書籍『精選言語文化』(2022年)にも掲載されている。そこではサントリー美術館蔵、海北友雪「徒然草絵巻」の該当部分と『なぐさみ草』挿絵を比較して違いを指摘するものとなっている。絵巻の図像はサントリー美術館の図録などでも確認できるが、やや入手しづらい。本稿では、ウェブ上で取得できる版本挿絵での比較を検討した。

7、ただし近世期において、宿の人物を女性と捉える注釈もある。高田宗賢『徒然草大全』(延宝5年刊)には次のようにある。

> 客を待えたる躰のそらだきならずして、常に焼しめたるてい也。荒たる宿とあれは女の住居歟。
>
> 忍ひたる気はひいと物あはれなり　此忍ひたるといふ詞すみにくし。かならず女色のやうには見るべからず。かくれ忍ぶといひて、さながら遁世者にてもなく、世間をむつかしくおもひてかくれゐたる所なるへし。

ここでは宿の人物は女性であるが、それは貴人の愛人ということではなく、俗世を厭い隠れ住んでいる人だとする。今日のような逢瀬の場面という立場はとっていない。これ以降も『徒然草』の注釈書は刊行されるが、女性説をとるものはなく、男性の友人と見る説が主流であるため、学習活動においては省略した。詳しくは注6前掲拙論参照。

8、学習指導要領、言語文化、2内容〔思考力、判断力、表現力等〕B読むこと(2)

ェ　和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動。

9、令和4年、京都橘高等学校、2年生で実施。

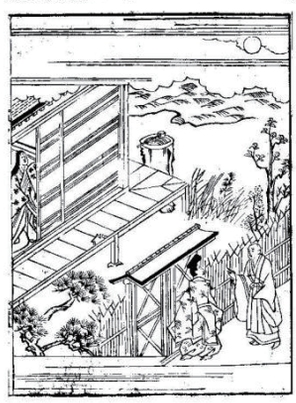
10、令和4年、大阪樟蔭女子大学、教員免許状取得に必要な科目で実施。

『徒然草』第三二段　絵画と享受ワークシート

◎江戸時代の挿絵

図A『なぐさみ草』慶安五年跋（一六五二）

図B『首書徒然草』元禄三年刊（一六九〇）



◎享受史

・江戸時代

【1】北村季吟『徒然草文段抄』（寛文七年）

跡まで見る人ありとはいかでか知らん　兼好かく見ゐたるべしとは亭主いかでか知らんとなり。彼の人、平生の心遣ひやさしき故となり。

【2】増穂残口『つれづれしののめ』（享保三年）

下ざまに客を送りて戸を荒くさしましてあくびなんどするは、沙汰の限りなり。友を愛するはこれぞ風雅の情なり。

・明治・大正

【3】井上頼文『徒然草講義』（明治二七年）

かの女のやさしく奥ゆかしく覚えたることは、人目の前ばかり、俄にしても出来ぬことにて只朝夕の心づかひによるとの意なり。

【4】沼波瓊音『徒然草講話』（大正三年）

さうして前段の返事の主の女であるらしいと云事が、この段の主人公が女であることの為に、なほ然うらしく思はれて来る。

・現代

【5】久保田淳　新日本古典文学大系『徒然草』（平成元年）

男を送り出したのちに月を見ていた、風流で奥ゆかしい女の話。

【6】小川剛生　角川ソフィア文庫『新版　徒然草』脚注（平成二七年）

思し出づる所　ふと思い出された女の家。

◎英訳　本文の「その人」に当たる部分に丸をつけよ。

【7】G.B.Sansom　"The Meditations of Recluse in the 14th Century"（明治四四年）

（前略）Betimes my friend came out, but I, still feeling the strange beauty of the scene, stood for a while hidden in the shade, and so perceived his host, instead of forthwith hastening to retire, open the shutters a little wider, as if to gaze upon the moon; and, as he could not have known that he was being watched, it must have been because he was at all times fond of such things. I heard that he soon after passed away.

【8】Donald Keene　"Essays in Idleness"（昭和四二年）

（前略）In due time, the gentleman emerged, but I was still under the spell of the place. As I gazed for a while at the scene from the shadows, someone pushed the double doors open a crack wider, evidently to look at the moon. It would have been most disappointing if she had bolted the doors as soon as he had gone! How was she to know that someone lingering behind would see her? Such a gesture could only have been the product of inborn sensitivity.

I heard that she died not long afterwards.

問一　図A・Bは同じく第三二段を描いたものであるが、どのような違いがあるか。

（解答例）

・Aは貴人が宿から退出している場面であり、兼好は外から中をうかがっている。

Bは退出後、貴人は兼好と共に中の様子をうかがっている。

・Aでは宿の人物は男性で描かれており、Bでは女性で描かれている。

問二　江戸時代から現代までの注釈書の見解がどのように変遷したかまとめる。

（解答例）

・江戸時代の注釈書では、貴人と宿の人物は友人関係にあるとしており、すると宿の人物は男性と捉えられていたと考えられる。明治以降は、宿の人物は女性と捉えられるようになり、現代でも宿の人物は女性と考えられている。

問三　絵画化と英訳で共通する特徴はどのような点か。

（解答例）

・本文に「その人」とだけある人物について、古文本文では「その人」と性別を意識しなくても自然に読むことができる。一方、絵画化の際には、男性か女性かをはっきりと描き分けなければならない。同様に、英訳でも男性であるか女性であるかは、判断をして he か she で書き分けなければ自然な文章にならない。